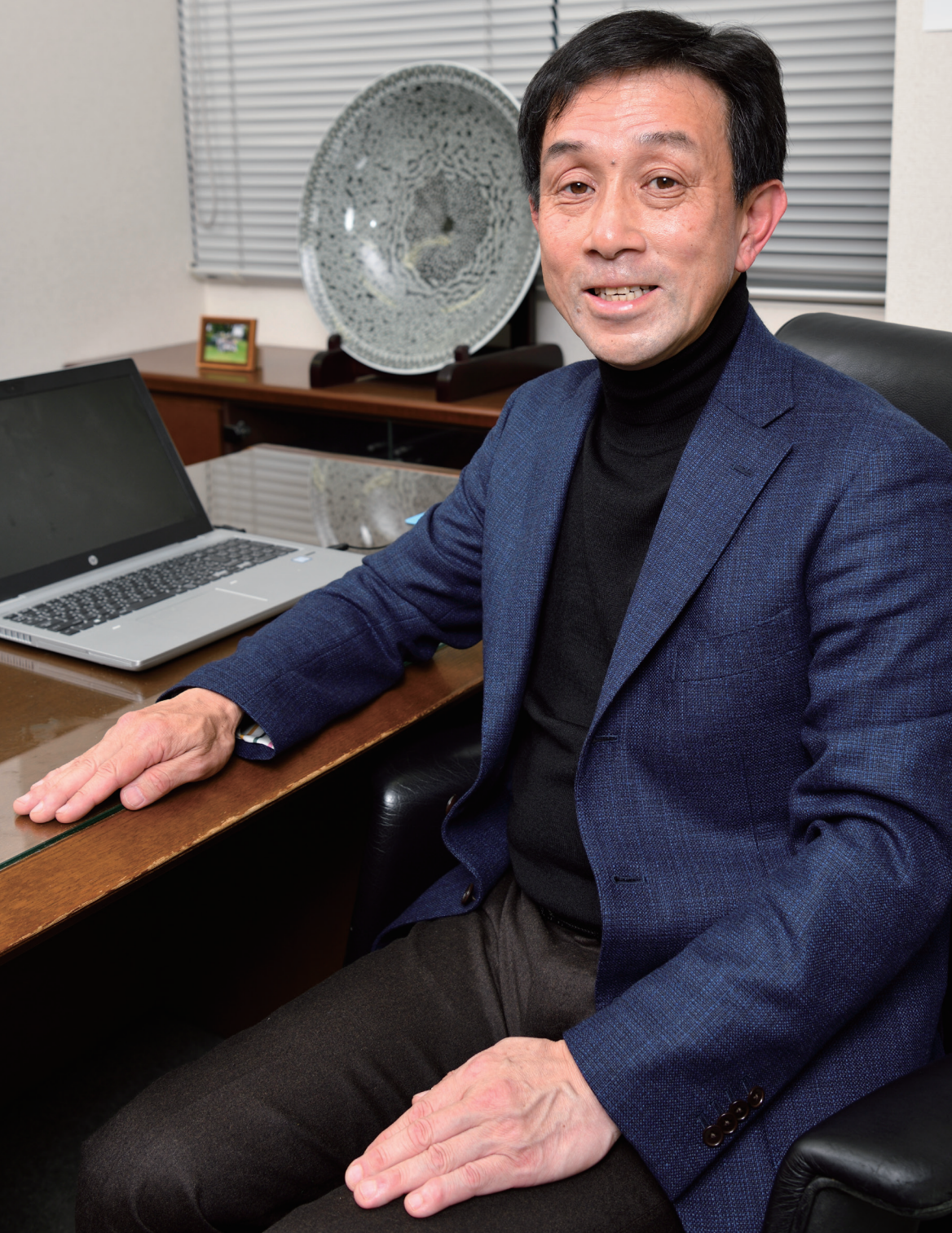




金融機関と製造業向けにITサービスを提供する名村情報システムは、システムの設計・開発・運用をワンストップで行えるのが強み。大手企業との信頼関係をベースに直接受託するケースが多く、顧客から学びながら成長を続けている。



代表取締役社長

嶋崎

TETSUO SHIMAZAKI

徹夫

名村情報システム株式会社  
〔佐賀県伊万里市〕

デジタルで地元・伊万里を活性化

設立 1983年7月

売上高 21億5600万円(2021年12月期)

銀行取引店 三菱UFJ銀行大伝馬町支店

東京の金融ビジネス本部内、伊万里焼の立派な大皿が飾られた社長室で。「今後は製造業のスマートファクトリー化の支援もしていきたい」

——会社設立の経緯についてお聞かせください。

もともとは、名村造船所の情報システム部門として、システムの設計や開発、保守などを行っていました。そこで培った技術やノウハウをもとに、一部が独立して1983年に設立しました。名村造船所の本社は大阪ですが、佐賀県伊万里市に造船所がある関係で、当社も伊万里市に本社を置いています。設立当時は、ちょうど銀行業界が第三次オンラインに取り組んでいたところで、当社は大手銀行のプロジェクトに参画し、高い評価を得ることができました。以来、名村造船所を中心とする製造業向けと金融機関向けを軸に、事業に取り組んでいます。

——嶋崎社長が入社されたきっかけは、どのようなものですか。

私は金融機関の出身です。89年の入行以来、ほぼ一貫して情報システム部門でITにかかわってきました。90年代後半から2000年代にかけて、金融機関の統合が相次ぎました。が、私自身もさまざまなシステム統合プロジェクトに参加しました。

一方、名村造船所は07年に函館ど

つくを、14年に佐世保重工業を子会社化します。これにともないシステム統合が課題となりましたが、経験のある人材が不足していました。業界は異なりますが、大規模なシステム統合の経験を評価していただいて、17年に名村造船所に入社しました。それから2年間は伊万里に住まいを移し、システム統合プロジェクトのリーダーを務めました。

——プロジェクトの成功に向けて、注意した点などをお聞かせください。

関係者の要求すべてに対応しようとすると、システムは個別最適化・複雑化し、構築期間も長くなります。いかに全体最適化を図るかが大きなポイントです。そこで、各関係者ができるだけ納得できるように心がけました。たとえば、生産管理については名村造船所のシステムを、会計やスケジューリング管理などは佐世保重工業のシステムをベースに開発するというように、各社のよさを生かした統合を進めました。一連のプロジェクトを完遂し、造船の工数削減、工期短縮といった効果が表れています。

——名村情報システムの強みはどの

ようなものですか。

まず、人材の力です。社員数は150人あまりで、その8割近くが九州出身者。九州では親会社の知名度があるので、地元の優秀な人材が集まります。私自身は神奈川県出身ですが、伊万里で2年を過ごすなかで、九州人の芯の強さやまじめさといったものを感じました。システム開発では困難にぶつかるとも少なくありませんが、こうした気質が仕事に生かされているのではないかと思います。

システムの企画・設計から開発、運用までワンストップのサービスを提供できるのも強みです。加えて、伊万里でデータセンターも運営しており、お客さまのニーズにトータルなサポートを行うことができます。また、開発などのサービスの多くは、お客さまである大手企業から直接受託しています。当社のような規模のITベンダーとしては珍しいことでしょうか。このようなポジションを生かして、お客さまと直接やり取りするなかで学び、技術を蓄積することができます。

——経営者としてのモットーをお聞

かせください。

従業員個々のよさを見つけ出すこと、そして適材適所を心がけています。全員野球といってもいいでしょう。それぞれのメンバーには得意なものがあります。すぐにはわからなくても、半年、1年と見ていれば何かが見えてきます。そのうえで、本人が前向きになれるような仕事を任せる。簡単ではないかもしれませんが、経営者としてはそうありたいと思っています。

——今後、どのようなことにチャレンジしたいとお考えですか。

新しいお客さまの開拓、IoT（モノのインターネット）をはじめ新技術への取り組みなど事業面の挑戦もあります。他方で、伊万里に本社を置く企業として地域活性化にも力を注ぎたいですね。伊万里市と民間の協力をベースに、21年夏、伊万里デジタルイノベーション協会が設立されました。これと並行して、東京などに本拠を置くITベンダー6社が、伊万里にサテライトオフィスを開設すると発表しました。デジタルで伊万里を元気にする、その一翼を担いたいと思っています。